

編集ノート：

鈴木泰東京大学教授（国語学、当時は御茶ノ水女子大学教授、写真）は、1987年にサン・パウロ大学客員教授としてブラジルに滞在。今回は、サン・パウロ日本語センター事業である「日本語学研究会」の指導のために、国際交流基金の日本文化紹介派遣プログラムで再度お招きしました。3月12日から22日まで滞在され、リオデジャネイロ連邦大学、サン・パウロ大学、リオグランドスル連邦大学でも講演し好評を博しました。

この原稿は、去る3月21日にサン・パウロ日本文化センターで行われた文化講演会のために一般向けに用意されたもので、鈴木教授の研究の中心的テーマではありませんが、日本の古典文学の名作を題材としながら、国語学研究の一端を紹介したもので、古典文学の世界を遊ぶ鈴木教授の洒落な一面が顕れており、ブラジルではまだ知る人の少ない、日本の古典文学への誘いとして、ここに紹介します。内容はアクアレラの読者のために編集されています。

日本の古典文学を語彙で比べたら？

東京大学教授 鈴木 泰

日本語は、千年以上も前にできた古典文学作品を現代人でも何とか読むことのできる数すくない言語ではなかろうか。古典文学に現れる世界は現代人からするとまことに不思議な世界であり、それに直接触れることのできるのは大変に幸せなことである。古典文学も、平安時代の作品にかぎれば、どれも一応王朝貴族世界の生活を扱っているということができ、たいした差はないようであるが、物語もあれば歌集や、日記もあるというようにジャンルも様々であり、そこに描かれる人物像やストーリーはどれひとつとして同じものはない。そうした1つ1つの作品の内容を、ここでは古典文学作品をその内容からではなく、それに用いられている言葉の点から見るとそれらはどのような違いを持っているかを考えてみたいと思う。

古典文学の言葉の違いを、始めて全体的に網羅的に示したのは、1971年に出版された宮島達夫編『古典対照語い表』であろう。これは、万葉・古今・後撰・竹取・伊勢・土左・蜻蛉・枕・源氏・紫・更級・大鏡・方丈・徒然の、日本の代表的な古典14作品を選んで、各単語の使用度数をしるした語彙表である。例えば、「明石」という地名は、源氏物語に48例、大鏡、伊勢、竹取に各1例、万葉に7例であるということがこれを見れば一目で分かるように古今・後撰）と散文（竹取・伊勢・土左・蜻蛉・枕・源氏・紫・更級・大鏡）になっている。

（1）万葉と古今の用語の比較

古典各作品の特徴は、それにどのような語彙が用いられているかに現れる。ここでは、万葉集と古今和歌集について、それぞれから特徴的な単語をえらびだして、両者を比較することにする。特徴的な単語のぬきだしには、単語の使用度数が基準になる。一方の歌集にはよくあらわれるが、もう一方にはあまりあらわれないような単語をえらばばいいわけである。ところで、万葉の総語数は50,0

70, 古今のそれは10, 015で, ほぼ五対一のわりあいになっているから, 単純に度数をくらべるわけにはいかない。「うめ」「さくら」はどちらにもあるが,

	万葉	古今
うめ	115	23
さくら	17	11

のようになっている。「うめ」ではちょうど5:1と平均とおなじなのに対し、「さくら」では古今における比率がたかくなっている。したがって、「さくら」は古今の特徴語彙と見られるが、「うめ」はそうはいえない。この点を考慮して、万葉と古今の語彙をくらべると、ある意味領域に関する用語が片方の歌集だけにおおくみられる、というばあいがしばしばある。万葉における人間についての用語や、海に関する用語、古今の方では時に関するものや動植物名などがおいことがめだつ。以下に、万葉と古今にそれぞれ特徴的な用語として、意味分野ごとにどちらかの歌集に特徴的な語彙を並べる。()のなかの数字は両歌集における使用度数で、斜線の前が万葉、あとが古今である。

その結果、たとえば、古今に植物名や動物名が多いのは、花や鳴く虫などの季節感の表現が古今では重視されたためであろう。また、万葉に海に関する表現が多く、古今にないのは、平安の貴族が自分自身では任地に赴くことがなかったため、その活動範囲が近畿の狭い範囲に限られていたことや万葉の歌い手が防人なども含む広い階層に及んでいたことなどをうかがわせる。また、古今に時間関係の語が多いことは時間認識が精細になったこと、万葉に人間関係の語が多いことは、男女の恋愛だけでなく、肉親に対する愛など人間関係のあらゆる面が歌の題材になっていることによるものであろう。

万葉	古今
----	----

【時】

日〈ひ〉(221/27)	世(71/50)
日〈け〉(51/0)	世々(1/3)
春日(18/0)	幾世(2/4)
あかとき(18/0)	八千代(0/5)
ゆふべ(38/2)	春(127/71)
月夜〈つくよ〉(43/0)	秋(112/108)
このごろ(51/0)	年(128/45)
いにしへ(55/4)	神無月(5/7)
	あかつきく(0/3)
	しののめ(0/3)
	夕暮れ(3/7)
	夜(31/17)
	月夜〈つきよ〉(0/3)
	けさ(11/11)
	ことし(5/6)

さき (5/7)
むかし (13/15)
果て (1/4)

【天地】

崎 (46/1)
荒磯 (34/0)
磯 (50/4)
川 (104/9)
川原 (18/0)
海 (84/4)
海原 (20/0)
浦 (110/12)
浦回 (32/0)
浜辺 (21/0)

【植物】

たちばな (38/0)	浮草 (1/4)
玉藻 (56/4)	菊 (0/10)
なでしこ (28/0)	呉竹 (0/3)
はぎ (56/5)	桜 (17/11)
木末 (17/0)	ささ (3/5)
	花すすき (0/6)
	ははそ (0/3)
	ふちばかま (1/4)
	みるめ (0/5)
	をみなえし (15/18)
	稲葉 (1/3)
	草葉 (1/5)
	こずゑ (0/3)
	木葉 (11/10)
	桜花 (20/30)
	花 (308/146)
	もみぢ (37/21)
	もみぢば (42/22)
	若葉 (6/9)

【動物】

馬 (47/0)	鹿 (15/10)
さをしか (36/0)	うぐひす (50/26)
鴨 (18/0)	はつかり (1/6)
たづ (42/3)	山ほととぎす (7/8)

ゆふつけ鳥 (0/4)
虫 (1/7)
夏虫 (1/3)
松虫 (0/4)
きりぎりす (0/6)
せみ (1/4)
うつせみ (0/3)
ささがに (0/3)

(2) 歌のことばと散文のことば

つぎに、平安時代の歌（古今・後撰）と散文（竹取・伊勢・土左・蜻蛉・枕・源氏・紫・更級・大鏡）の語数をそれぞれ一括し、どちらかに特徴的なものをえらんで、歌のことばと散文のことばを比べてみる。歌の語数は21, 970, 散文の語数は323, 838だから、なまの度数をくらべても意味がないので、理論的に出現が期待される理論度数に比べてみる。すると、次のような傾向が見られる。歌集に自然物・自然現象を表す語彙がおおく、散文に存在などの基本的な動詞や抽象名詞が多いことが知られる。

歌	散文
さくらばな (桜花)	おぼす (思)
しらつゆ (白露)	はべり (侍)
しらくも (白雲)	のたまふ (宣)
あきかぜ (秋風)	いみじ (甚)
こひ (恋)	やう (様)
あまのがは (天河)	まゐる (参)
しらなみ (白波)	をかし (可笑)
てふ (蝶)	おはします (在)
かりがね (雁音)	けしき (気色)
こす (越)	ありさま (有様)
よろづよ (万代)	ものす (物)
あわ (泡)	すこし (少)
ゆめぢ (夢路)	れい (例)
よしの (吉野)	おとど (大臣)
ちはやぶる (千早振)	さぶらふ (侍・候)

(3) 朝型文学と夜型文学、「春秋」型文学と「夏冬」型文学

以上は、作品やジャンルに注目して、特徴的語彙を考えたものであるが、逆に特定のことばに注目することによって、作品の特徴を考えることもできる。夜の時間帯を表わす「夕・夕影・夕陰草・夕風・夕川・夕顔・夕狩・夕霧・七夕」「夜・雨夜・幾夜・十六夜・朧月夜・小夜・夜鳥・夜霧・良夜」

などにたいして、朝の時間帯を表わす「朝・朝影・朝霞・朝風・朝川・朝鳥・朝獵・朝餉・朝雲」「暁・暁起・暁方・暁月夜・暁・暁月・暁月夜・暁露・暁闇」がどれくらい現れるかを各作品ごとにしらべると、以下ようになる。

	朝	夜	朝／夜
万葉	295	655	0. 45
竹取	1	12	0. 08
伊勢	15	62	0. 24
古今	36	123	0. 29
土左	8	29	0. 28
後撰	38	132	0. 29
蜻蛉	45	158	0. 28
枕	74	181	0. 41
源氏	275	882	0. 31
紫	23	57	0. 40
更級	26	100	0. 26
大鏡	16	64	0. 25
方丈	7	10	0. 70
徒然	23	57	0. 40

結果、平安時代の作品（とくに歌集・物語系のもの）は夜型であることが知られる。

同じようにして、春秋にかかわることばと夏冬にかかわることばに注目して、「春霞，春風，春草，春雨，春野，春花，春辺，春山」「秋風，秋霧，秋萩」にたいして「夏草，夏虫，夏山」などがどのくらい登場するかについて、各作品ごとの出現状況を見ると、以下ようになる。

	万葉	古今	枕	源氏	大鏡	徒然
「春」	127	71	19	119	5	12
「夏」	13	8	18	21	3	6
「秋」	112	108	18	130	4	12
「冬」	18	7	18	11	5	4

また、春と秋を足した数で、夏と冬を足した数を割って、その割合をもとめると、次のようになる。

	夏冬／春秋
万葉	0. 13
古今	0. 08
枕	0. 97
源氏	0. 13
大鏡	0. 89
徒然	0. 42

結果、やはり平安時代の作品（とくに歌集・物語系のもの）は春秋型であることが知られる。それに対して、随筆や歴史は、記述する事項を春と秋だけにしぼるわけにはいかないの、夏と冬の割合とたいした差はでない。

（４）意味分類に基づく古典作品の比較

さて、次に、古典文学作品に用いられた用語を意味分類し、意味分野ごとに各作品の用語を比較するとどのようなことが分かるかを考えてみたい。このため、『古典対照語彙表』の各語に、現代日本語の語彙を意味分類しそれを示す番号をつけた『分類語彙表』の番号をつけた。

数字はここでは省略せざるを得ないが、特徴としては、抽象的関係の「季節」は歌集が高く散文はひくい。「昔」など過去を表す語彙は、伊勢物語が断然高く、徒然などはひくい。この他、住居、家屋、乗り物を表す語、および数詞では、大鏡、土佐が際立ち、人間活動の主体である「男女」では、伊勢が断然高く、「夫婦」は万葉が高いという具合である。また、固有名詞の比較では、

	個有人名	個有地名
古今	0. 27	17. 22
竹取	16. 85	3. 60
大鏡	19. 42	6. 29

などが対照的である。（ ）内の数値は、作品の総語数にたいするそれぞれの使用度数の割合で、単位は千分の一を、1とするパーミルである。一方、自然物・自然現象となると、歌集の優位は、あきらかである。いくつかの項目について、1位・2位の作品をあげてみる。

「雲」	古今 4. 37,	万葉 3. 67
「雨・雪など」	古今 5. 29,	後撰 4. 50
「天気」	土左 6. 89,	蜻蛉 3. 79
「波・潮」	土左 5. 92,	後撰 3. 98
「天体」	土左 7. 05,	万葉 6. 62
「地形・山野など」	万葉 15. 07,	古今 13. 98
「川・湖など」	万葉 6. 23,	古今 5. 35
「海・島など」	万葉 10. 72,	土左 9. 93
「植物名」	万葉 14. 63,	古今 12. 10
「技・葉・花など」	古今 18. 57,	後撰 15. 38
「鳥」	万葉 7. 21,	古今 6. 70

その他、「はずかしい・ほしい・くやしい」「好き・きらい」（精神および行為）「良不良・適不適」「調子・出来」（価値判断）などを表す語彙は、枕が高いなど、使用語彙にそれぞれの作品の特徴が浮き彫りになっている。また、色を表す名詞で、源氏と枕を比べると、「色」1位は枕 4. 24 で、源氏 1. 91をはるかにひきはなす。

以下に両作品の色に関する用語の使用度数をしめすが、源氏の総語数が枕の6倍強であることからすれば、枕における色彩への関心はあきらかである。

	源氏	枕
あかし	38	33
あをし	6	18
くろし	23	23
しろし	79	76

このように、語彙比較によって、主要な古典文学作品の特徴が浮き彫りにされるが、この手法は、説話集『今昔物語集』の中の説話の比較にも応用できる。しかし、これについては紙面の都合で割愛する。

(参考文献)

宮島達夫「語いの類似度」(『国語学』82集, 1970)

宮島達夫「万葉と古今の用語の比較」(『佐藤茂教授退官記念論集

国語学』1980) 宮島達夫「古典用語の統計的研究」国語彙史研究会(1999)発表

鈴木泰「『古典対照語い表』のコード付け」(『比較語彙研究』1998)

鈴木泰「古典対照語い表と分類語彙表」(『国文学 解釈と鑑賞』1999-1)